

麟徳具注曆（正倉院）と宣明具注曆（敦煌）

——各断簡（残曆）間の曆注について——

大谷 光男

一、麟徳具注曆の曆注

この稿は曆注についての研究ではなく、曆注の擇日（配当）の紹介である。唐代の呂才選といわれる『大唐陰陽書』は京都大学人文科学研究所蔵本によって、大衍曆の曆注の集成書と解されている。しかし『旧唐書』呂才伝によると、呂才は麟徳二年（六六五）に卒す⁽¹⁾とあるので、本来ならば麟徳曆（麟徳二年～開元十六年）の曆注書といえる。もっとも京都大学蔵本には内題に、

大唐陰陽書 卅三 下卷 開元大衍 曆注⁽²⁾ 第 号 唐陰陽書 源保筆⁽³⁾

とあるので、「開元大衍曆注」の記載は貞観年間以後のことであろう。奥書には「此書兩卷以陰陽頭兼曆博士從五位下賀茂保憲朝臣（貞元二年八月七七没）本寫伝也、奥注云、以三春家本上下兩卷此校既早、彼本奥注、嘉祥元年歲次戊辰七月朔戊午五日壬戌從五位上曆士大春日朝臣直野麻呂（書之）」とある。嘉祥元年（八四八）当時の日本は、大衍曆を用いており「開元大衍 曆注」はこれに倣つての記載とみられる。京都大学蔵本は上記のように下卷（七月～十二月に至る）の一冊であるが、日本で宣明曆が行用している元慶元年（八七七）七月廿二日付の太政官符「応レ加ニ行曆書廿七卷ニ事」（『類聚三

代格』卷十六）の条に、大衍曆経一卷、曆議十卷、立成十二卷、畧例奏草一卷、曆例一卷、曆注二卷の二十七卷がみえる。一方、『唐書』芸文志曆算類には開元大衍曆経一卷、曆議十卷、曆立成十二卷などを載せているが、問題の曆注二卷は五行類にも記されていない上に、大衍曆法による具注曆が中国・日本に現存していないので、具体的には明らかでない。

なお、大春日朝臣眞野麻呂の曆道所伝は『日本文徳天皇実録』天安元年（八五七）正月丙辰の条に「眞野曆曆道独歩、能襲祖業」、相伝此道、「于今五世也」とあり、さらに曆奏を加えて、『年中行事秘抄』十一月一日の条に「奏御曆事、弘仁式云、具注御曆二卷ハハ朋以後、為三社卷……天平宝字七年（七六三）、眞野曆祖父船主、造進四種曆以降、交蝕合度、時候不佚、国家須用、于今相統」とみえる。

『大唐陰陽書』の日本への将来は、山下克明氏の調査によると、正倉院文書の天平十八年（七四六）の写疏所解に『陰陽書』を書写したことがみえるので、それ以前のことであろうという⁽⁴⁾。確かに正倉院蔵の具注曆をみる限り、この『陰陽書』は『大唐陰陽書』の初期の写本であるといっても過言ではない。『旧唐書』経籍下の五行類条に「陰陽書五十卷黜才」「新撰陰陽書王玼撰」「堪輿曆注二卷」とあり、『新唐書』芸文志の五行類には「呂才陰陽書五十三卷」「王玼新撰陰陽書三十卷」「張衡堪輿曆注二卷」などがみられる。また『日本国見在書目録』五行家条に「大唐陰陽書五十一卷」「新撰陰陽書五十卷」を載せているが、「堪輿曆注」はない。しかし『日本後紀』嵯峨天皇弘仁元年（八一〇）九月廿八日の条に（原漢文）、

公卿奏議して言はく、謹みて大同二年（八〇七）九月壬子の詔書を案ふるに、僞して日者は虚伝、千妨輻湊し、占人は妄告をもつて万忌森羅、又大會・小會の言、歳対・歳位の説、天恩は五辰に発し、將軍は四仲に行く、斯等は並びに堪輿雜志に出で、舉正の典に非ず。宜しく賢聖の格言に拠るへく。一へに曆注を除くべしと。臣等が商量するに、曆注の興るは歴代に行用して男女の嘉会、人倫の大なり。農夫は稼穡して国家の基なり。伏して望らくは……旧に依つて具注せられんことを（下略）、

とある。右文中の「堪輿雜志」は、おそらく「堪輿曆注」の一節と考えられる。「新撰陰陽書」は『続日本紀』天平宝字元

年（七五七）十一月癸未の条にみえ、陰陽生の必修書であつたが、内容は明らかでない。

ところで日本が将来した『大唐陰陽書』は五十一巻本であろうが、その廿二・廿三巻の二巻が写本で現存しているに過ぎない。しかもこれが暦注に当る。したがって、暦注書がそのまま陰陽書を意味しないのである。『唐六典（杜嗣之）』には、「凡暦注之用六」とあつて、その六とは左のごとくである。

一日大會、二日小會、三日雜會、四日歲會、五日除建、六日人神、

意味するところは、造暦に直接関係ない暦注を無造作に掲げたものといえる。一般に暦注といへば、暦学（造暦・暦日の推算）・天文学（日食・月食推歩）といった暦道が係わる科学とは別に、暦・天文に纏わる非科学的な迷信、吉凶禍福、禁忌などを、具注暦の上段・中段、特に下段において著しいが、これらを一括して暦注（5）という。その主なものは節切りの暦注（血忌・婦忌・九坎・厭・厭対・無堯・月煞・復日・重日・往亡・凶会日・天赦など）であり、ここに『大唐陰陽書』が挙げられる。日本の古代・中世には日月食の推歩は算（竿）術といわれ、かつ具注暦の日月食の記録を、室町時代の「吉田家日次記」（7）には暦注とある。

日本では唐の麟徳暦を儀鳳暦と称するが、その所伝は「新羅本紀」文武王十四年（六七四）——唐高宗上元元年、日本天武天皇三年——春正月の条に、入唐していた徳福が新暦法を学び帰国したので、研究の上、新暦法を用いた（8）、とある新暦が麟徳暦であり、儀鳳年間に簡略したものが儀鳳暦と称され、『日本国見在書目録』暦数家の条に「麟徳暦八、儀鳳暦三」とあるのが、その証といふべきであろう。見在書目録に韓三国の書籍が掲載されていても不思議ではなからう。日本における麟徳暦の伝来は唐で行用の二年後である。それは今井漆氏の「野中寺金銅弥勒菩薩造像記」研究によって知られ、「丙寅年」は高宗乾封元年（六六六）に当る（9）。なお、正倉院の具注暦が麟徳暦と断定できるのは「正月中啓蟄」「二月節雨水」とあるからで、この表記が戊寅暦（武徳二年）麟徳元年に続く麟徳暦の特色である。唐代の他の暦では「正月中雨水」「二月節驚蟄」とある。「啓蟄」の表記法も特色の一つである。天平十八年（七四六）の具注暦では二月八日が「二月節雨水」、

天平二十一年（七四九）の具注曆では二月十一日が「二月節雨水」、天平勝宝八歳具注曆では正月十三日が「正月中啓蟄」とあり、以上の三曆とも断簡ながら麟徳曆であることがわかる。しかし、卷末を三曆ともに失っているので進曆の期日は不明である。当然のことながら曆本進寮の期日も決めていたはずであるが、これまた新史料の発見を期待しているのが現状である。

麟徳曆に限らず、具注曆間の曆注を探るには、曆の上段に記載されている(1)月日の干支、(2)納音、(3)十二直をもって、同一曆法の具注曆内から照合すれば、簡単に見出ることができる。同一曆法による年度ごとの具注曆が十分に保管されていたとすれば、具注曆からその曆法の曆注が完全に復元できるわけである。正倉院蔵の麟徳曆は破損の上、わずか三年分にして、しかも五月以後を失っている状態で、書写の際の加除、誤記もあるはずで、十分な成果は得られないが、『大唐陰陽書』と比較することによって理解できる部分がある。左に比較を表にして掲げ、問題のあるものには註記した。(A) 天平二十一年二月廿四日一十一廿十七日 (B) 天平二十一年三月二月廿九日廿四日 (C) 天平二十一年三月廿四日天平勝宝八歳三月廿二日廿九日 (D) 天平勝宝八歳三月八日一十一廿二日

(A) 天平十八年具注曆

(二月)

廿四日(丙)午水平 歳後小歳位祭祀加冠拜官納婦吉

廿五日丁未水定 歳後小歳位血忌

廿六日戊申土執 社 歳後小歳位祭祀解除吉

廿七日己酉土破 歳後天恩厭療病解除葬吉

廿八日庚戌金危 歳後天恩嫁娶吉

廿九日辛亥金成

歲後天恩母倉加冠入学移徙起土修宅治井竈吉

卅 日壬子木收

歲前天恩母倉祭祀加冠結婚移徙修宅井竈種蒔斬草吉

天平二十一年具注曆

〔二月〕

十一日丙午水平雨水二月節

歲後小歲位祭祀加冠拜官納婦吉

十二日丁未水定

歲後小歲位血忌

十三日戊申土執

歲後小歲位祭祀解除吉

十四日己酉土破

歲後天恩療病厭解除硃殯葬吉

十五日庚戌金危

歲後天恩嫁娶吉

十六日辛亥金成

望 歲後天恩母倉加冠入学移徙起土修宅治井竈吉

十七日壬子木收

歲前天恩母倉祭祀加冠結婚移徙修宅井竈種蒔斬草吉

〔註〕硃殯日の擇日は把握できていない。『大唐陰陽書』の殯埋日に当るのか、天平二十一年曆三月庚寅木開硃殯が『大唐陰陽書』三月庚寅木開殯埋とある。

〔B〕天平十八年具注曆

〔三月〕

二日甲寅水閉

歲前婦忌塞穴葬吉

三日乙卯水建

陽錯厭(対)

四日丙辰土除 歲前療病解除吉

五日丁巳土滿 歲前。小歲後。祭祀加冠拜官移徙修宅治井竈吉

六日戊午火平 歲後祭祀加冠移徙納歸吉

七日己未火定 歲後移徙血忌

〔註〕三月節清明は三月八日庚申、厭日と厭対日は二月（八日雨水）節切で、二月十五日、同二十七日の酉日が厭日、二月九日、同二十一日、三月三日の卯日が厭対となる。

天平二十一年具注曆

〔二月〕

十九日甲寅水閉 歲前婦忌塞穴葬吉

廿日乙卯水建 陽錯厭対

廿一日丙辰土除 歲前療病解除吉

廿二日丁巳土滿 歲後。小歲前。祭祀加冠拜官移徙修宅治井竈吉

廿三日戊午火平 歲後祭祀加冠移徙納歸吉

廿四日己未火定 歲後往亡血忌

〔註〕二月節雨水は二月十一日丙午、二月入節日より十四日目の廿四日己未が往亡日に当る。○印（筆者）の大歳神・小歳神の擇日の記載は曖昧である。『簠簋内伝』卷三、太歳神前後対位事が参考になろう。小歳神の擇日については記されていない。

(C) 天平十八年具注曆

〔三月〕

廿四日丙子水成 没 大小歲対婦忌祭祀拜官治碓葬吉

廿五日丁丑水收 大小歲対嫁娶結婚吉

廿六日戊寅土開 大小歲天赦血忌厭対療病吉

廿七日己卯土閉 歲対天恩祭祀官拜結婚作竈塞穴吉

廿八日庚辰金建

廿九日辛巳金除 歲位天恩母倉拜官治竈吉

(欠)

天平二十一年具注曆

〔三月〕

十二日丙子水成 清明
三月節 大小歲対母倉婦忌祭祀拜官治碓碓結婚斬草葬吉

十三日丁丑水收 大小歲対嫁娶(結) 婚吉

十四日戊寅土開 大小歲対天赦血忌療病厭対吉

十五日己卯土閉 歲対天恩祭祀拜官結婚起土塞穴吉

十六日庚建金建 陰位

十七日辛巳金除 歲位天恩拜官起土治井竈療病吉

十八日壬午木滿 歲位天恩斬草葬吉

天平勝宝八歲具注曆

〔三月〕

廿三日丙子水成 下弦 大小歲対帰忌祭祀治碓斬草葬吉

廿四日丁丑水收 大小歲対嫁娶結婚吉

廿五日戊寅土開 大小歲対天赦血忌厭対

廿六日己卯土閉 歲対天恩祭祀

廿七日庚辰金建 陰位

廿八日辛巳金除 歲位天恩母倉拜官療病治竈吉

廿九日壬午木滿 歲位天恩母倉斬草葬吉

（D）天平十八年具注曆

〔三月〕

八 日庚申木定 清明三弦 陰錯厭

九 日辛酉木執 歲後解除葬吉

十 日壬戌水破 歲後九坎療病吉

十一日癸亥水危 絶陰

十二日甲子金成 絶陰帰忌

十三日乙丑金收 絶陰

十四日丙寅火開 絶陰厭対血忌

十五日丁卯火閉望

絶陰

十六日戊辰木建

単陰

十七日己巳木除

歳位拜官治竈經^(終)療病解除吉

十八日庚午土滿

歳位加冠治碓斬草葬吉

十九日辛未土平

歳位

廿日壬申金定

歳位厭沐^(浴)治解除葬吉

廿一日癸酉金執

歳位祭祀解除葬吉

廿二日甲戌火破下弦

大小歳対九坎

廿三日乙亥火危<sup>穀雨
三月中</sup>

大小歳対帰忌祭祀拜官治碓磑葬吉

〔註〕三月節切の帰忌日は子日、廿三日帰忌は誤記。なお三月中蟄雨は穀雨に正した。

天平勝宝八歳具注曆

〔三月〕

七日庚申木定

陰錯厭

八日辛酉木執

歳後解除斬草葬吉

九日壬戌水破上弦

歳後九坎

十(日)(癸)亥水危

絶陰

十一日甲子金成

絶陰

十二日乙丑金收^(用)土壬

絶陰

十三日丙寅火開

絶陰厭対血忌

十四日丁卯火閉

絶陰

十五日戊辰木建

穀雨
三月中

单陰

十六日己巳木除

望

歲位母倉拜官治竈解除吉

十七日庚午土滿

歲位母倉治碓斬草葬吉

十八日辛未土平

歲位

十九日壬申金定

歲位厭

廿日癸酉金執

歲位往亡祭祀解除吉

廿一日甲戌火破

大小歲対九坎療病吉

廿二日乙亥火危

大小歲対結婚治竈吉

〔註〕三月節清明は二月廿九日癸丑、巳と午日が母倉日、三月入節日より二十一日目の廿日癸酉が往亡日に当る。

二、宣明具注曆の曆注

日本における唐の宣明曆の採用は、貞観元年（八五九）六月に渤海大使烏孝慎が齎し、同三年六月十六日に陰陽頭兼曆博士大春日眞野麻呂が宣明曆を検討した結果を報告し、当日、長慶宣明曆経として頒行することを決めた。よって陰陽寮が進曆日の十一月一日に、翌貞観四年（八六二）の具注御曆二巻を献じ、諸司にも頒曆を配布したと考えられる。日本の宣明曆の採用は、渤海・新羅諸国の採用に押されてのことであろうが、なお一つに、唐が懿宗大中十四年（八六〇）十一月二日丁丑¹⁰を冬至に撰んだことによる。唐における懿宗大中十四年前の朔旦冬至は、武宗会昌元年（八四一）十一月丁酉朔である。日

本のばあいは大衍曆で承和八年（八四一）十一月丁酉朔が朔旦冬至であり、次の貞観二年（八六〇）「十一月丁丑、朔旦冬至」〔『三代実録』〕は、当時併用の五紀曆でも宣明曆同様に十一月二日丁丑、冬至であつた。したがつて、朔旦冬至にするために丁丑朔と改めてたが、『三代実録』は十一月丁丑の干支に「朔」字を加えなかつた。しかし以後は、十九年毎に十一月一日が冬至に当らない日でも、無理を承知で十一月朔旦冬至に改めさせ、宮中において祝賀するのが恒例となつた。

また、宣明曆採用に先立ち、天安元年（八五七）正月に、開成四年曆（八三九）・大中三年曆（八四九）を、貞観三年六月には大中十二年曆（八五八）とを比較しているが、唐代における頒曆（具注曆）の月日は史料不足で分りかねる。史料によると宋代の宝祐四年具注曆（一二五六）は前年十月、明の大統曆は毎歲冬至日であつたが、成化十五年（一四七九）から十月朔日に改頒したという（『明史』志第五十欽天監）。

唐では宣明曆を長慶二年（八二二）から景福元年（八九二）まで七十一年間にわたつて使用したのであるが、しかし良質な宣明具注曆の入手は未だに困難である。宣明曆にしても、唐から日本に渡航して来た僧侶や商人はかならず曆本を持参していたであろうし、日本人にしても帰国に際しては写本か、抄本を大宰府・京都に齎したものと考えられる。もちろん、具注曆の写本ではなく、旅行用・家庭用の抄本は唐の国内でも広く頒布されていたはずである。

慈覚大師（円仁）が著わした『入唐求法巡礼行記』の開成五年（八四〇）正月十五日条に、当年の曆日の抄本を得、正月から十二月に至る曆日の具注を勘過したとある。なるほど良質な曆日抄本でなかつたとみられる。原本に接していないので謹むべきであろうが、一部は補足解説できるようである。○印は筆者が付けた。

正月大一日戊寅土建	四日得平	十一日雨水	廿六日驚蟄
二月小一日戊申土破	十一日社	春分	廿六日清明
三月大一日丁丑水閉	二日天赦	十二日穀雨	廿八日立夏
四月小一日丁未水平	十三日小滿	廿八日芒種	

五月小一日丙子水破 十四日夏至 十九日天赦。
六月大一日乙巳火開 十一日初伏 十五日大暑 廿日立秋。
七月小一日乙亥土平 二日陰伏 十五日処暑。
八月大一日甲辰火成 白露 五日天赦 十五日社 十六日秋分。
九月小一日甲戌火除 二日寒露 十七日霜降
十月大一日癸卯金執 二日立冬 十八日小雪 廿日天赦。
十一月大一日癸酉金收 三日大雪 廿日冬至。
十二月大一日癸卯金平 三日小寒 十八日大寒 廿六日臘。

〔解説〕正月四日辛巳得は月徳合であろう。正月は丙の日が月徳日で、辛の日が月徳合日である。平は十二直の一つで「正月四日辛巳金平」となる。

この年の十二直のうち、二月一日は執、三月一日は收、四月一日は滿、十一月一日は開である。

二月十一日戊午で、社日は春分・秋分に近い戊の日に当る。以下同じ。

三月二日戊寅で、天社は春が戊寅、夏が甲午、秋が戊申、冬が甲子の日である。六月十一日乙卯初伏は六日庚戌初伏の誤りであろう。十六日庚申中伏、廿日立秋は廿日立秋であろう。

七月一日乙亥土平は火平の誤り、二日陰伏は六日庚辰後伏と考えられる。日本の安倍氏が伝える。『陰陽略書』（元暦元年八一八四V書写）の「一、曆注諸神吉凶」に三伏日を掲げて、

三伏日、伏者蔵也、夏至後三庚為初伏、四庚為仲伏、立秋後一庚為後伏、此日不可遠行、療病、娶婦大凶、とある。これに倣って訂正した。なお敦煌から将来された乾寧四年曆（八九七）・雍熙三年曆（九八六）には後伏、同光四年（九二六）曆には末伏、宝祐四年具注曆（一二五六 台湾国家図書館蔵）にも末伏とみえる。

八月十八日辛酉秋分（『唐代の暦』）、十月廿日天赦は廿二日甲子天赦の誤りであろう。

右の開成五年暦日抄本は東洋文庫 157（平凡社刊 昭和四五年二月刊）塩入良道補注本（1）を用いた。

なお参考までに、開成五年に当る日本の承和七年（大衍暦）では内田正男編『日本暦日原典』によれば左のごとくである。

月 朔

正月大戊寅朔（土建）	十日雨水	廿六日驚蟄
二月小戊申朔（土執）	十一日春分	廿六日清明
三月小丁丑朔（水收）	十二日穀雨	廿八日立夏
四月大丙午朔（水除）	十四日小滿	廿九日芒種
五月小丙子朔（水破）	十四日夏至	廿九日小暑
六月小乙巳朔（火開）		十六日大暑
七月大甲戌朔（火平）	二日立秋	十七日処暑
八月小甲辰朔（火成）	二日白露	十八日秋分
九月大癸酉朔（金建）	四日寒露	十九日霜降
十月大癸卯朔（金執）	四日立冬	十九日小雪
十一月大癸酉朔（金開）	五日常雪	廿日冬至
十二月小癸卯朔（金平）	五日小寒	廿日大寒

『続日本後紀』承和七年の月朔干支も内田氏の『日本暦日原典』と同じである。前年に閏正月あり（『新羅本紀』同様）。

日本では数多くの宣明暦を入手していたが、暦道が後述の理由で遣唐使として参加しなかったため、宣明暦法による暦の推算法、日食・月食の推歩法を直接習得することがなかった。したがって、暦注も従来の呂才撰といわれる『大唐陰陽書』

が用いられていた。内容は逐次変遷があるが、初期には転写にすぎなかった。⁽¹¹⁾

承和元年（八三四）正月、遣唐大使に藤原常嗣、副使に小野篁が任命されたが、四艘の船団は波浪によって船舶が破損するなど出発が延期されていた。同五年六月には小野篁は病と称して乗船せず、さらに遣唐使に選任されていた曆請益刀岐直雄貞・曆留学生佐伯直安道・天文留学生志斐連永世などは波濤をおそれて、同六年三月、相い共に亡匿したが発見され、法に照して罪は斬刑に当るが、特に死罪一等を降して佐渡国に流罪となった（『続日本後紀』）。小野篁は隠岐国に配流となった。陰陽寮で渡唐したのは、結局陰陽師春苑玉成の一人とみられ、同八年（八四一）正月には唐で得た「難儀一卷」を陰陽寮で諸生に教授することになった。同七年二月には曆請益刀岐直雄貞が勅によって召喚されているが、佐伯安道と志斐永世の兩名の記述はない。律において「稽⁽¹²⁾之古典」（『続日本後紀』承和六年三月丁酉条）というものの、「嵯峨天皇の弘仁年中から死刑の執行が停止⁽¹²⁾」されているので、小野篁にしろ流罪は承知の上のことであった。渡唐途中の溺死よりも、また大使との不仲という関係もあるうが、流罪を選ばやがて召喚もあるうと安易に目論んでいたであろう。

ところで、『延喜式』巻三十、大蔵省（入諸蕃使）入唐大使の条をみると、遣唐使の組織は大使、副使、判官、録事、知乗船事、訳語、請益生、主神、医師、陰陽師、画師、史生、射手、船師、音声長、新羅、奄美等訳語、卜部、留学生、学問僧、謙従、雑使、音声生、鍛生、鑄生、細工生、船匠、柁師……水手という構成であり、曆とか天文などは請益生または留学生に一括され、陰陽師がそれらの代表を兼ねていたとも考えられる。しかし、陰陽師春苑玉成にしても、実学の曆学・天文学といった書籍は将来した形跡はない。

天平七年（七三五）四月に、吉備眞備は唐から大衍曆経一卷、大衍曆立成十二卷、測影鉄尺一枚などを齎し朝廷に献じたが、その甲斐あって天平宝字八年（七六四）から大衍曆を施行している。眞備は宝龜六年（七七五）に没しているの
で、大衍曆の指導は眞備が教授したものと考えられる。五紀曆のばあいは貞観三年（八六一）六月十六日付の大政官符「応^レ用三長慶宣明曆経一事」（『類聚三代格』巻十七）の条に、「厥後、宝龜十一年（七八〇）遣唐使録事内薬正従五位下羽

栗臣翼貢^二宝応五紀曆經^一、申云、大唐今停^二大衍曆^一、唯用^三件經^一者、天応元年（七八一）有^レ勅令^下抛^二件經^一造^上曆、無^二人習学^一、不^レ得^二講成^一、猶抛^二大衍曆經^一とみえる。すなわち、五紀曆を齎した者は遣唐使録事であり、内葉正といえは医師という羽栗翼であつた。翼が五紀曆を唐で習得せずに日本に将来したことは、宝龜八年（七七七）六月の遣唐使のなかに曆留學生が参加していなかつたことになる。その背景には、日本の公卿社会では中国の曆法が新規になつても興味を示す者がいなかつたのである。その一例として、『百鍊抄』永承五年（一一〇五）九月に曆博士・宿曜師・算博士が揃つた上で、宋曆を披見しながら永承五年の朔旦冬至を論議し、承平六年（九三六）の朔旦冬至は曆道が見逃した結果であるとした。しかし曆道の賀茂道平は、曆に和漢の相違があつても、公家は異朝の説（曆本）を採用することの提案もなかつたと述べている。春苑玉成が将来した「難儀一卷」についても、山下克明「遣唐請益と難儀¹³」に詳しく、『類聚符宣抄』第六、文譜所収の承和九年（八四二）の宣旨中にみえる「陰陽難儀一卷」が玉成が齎らしたものであろう。また山下氏は「難儀」とは「唐決」のような問答集の形態のものであつたと考えられると述べている。芸文志類に見当たらないが、「難經本義」（『医統正脈』明 萬曆二九版）、「難經解義」（『宋史』芸文六、医書類部）などは医書類で、的はずれの感があるが、一応検討する必要もあろう。但し、義と儀とに別様の解決があれば単なる思付に止る。

唐の具注曆で現在手許にあるのは敦煌から将来された写真版で、しかも全て断簡（残曆）である。日本についての研究は、藪内清「スライン敦煌文献中の曆書」、藤枝晃「敦煌曆日譜¹⁴」などの優れた研究がある。中国には最近、鄧文寛録校『敦煌天文曆法文献輯校』が出版されているが、筆者は未だ入手していない。

宣明曆に係わる敦煌曆書で(1)月日の干支、(2)納音、(3)十二直をもって宣明具注曆の曆注を比較できる曆書は、知見の範囲では左の大和三年（八二九）の具注曆と光啓四年（八八八）の具注曆の二曆である。比較できる曆日は前者が十一月廿二日から十二月五日、後者が十一月四日から十六日に至る各十三日間過ぎない。下段の両曆注をみると、戊戌木開・癸卯金平・丁未水危・己酉土收などの曆注は両曆において対応するものではなく（前者には置・魁不載）曆注は別系統のものである。

光啓四年の具注曆の曆注は崇玄曆法による景福二年（八九三）の具注曆に極めて近い。今井湊氏は『唐代の曆』を計算するに際して、敦煌の曆書は整理が終了してないので、参照するに止めたと記しているように、敦煌の曆書の曆注も併せて研究する必要がある⁽¹⁵⁾。今回は両曆の曆注を紹介するに止め筆を擱く。

大和三年曆 （本） PELLIOT CHINOLS 2797

己酉年曆日

十一月小

廿二日戊戌木開

大會母倉祭祀沐浴起土葬埋治病

廿三日己亥木閉

大會裁衣重蓋屋堤防塞穴吉

廿四日庚子土建

麤角解

大會歲對地季厭拜官昇壇市易吉

廿五日辛丑土除

大會歲對□無翹天季破屋固

廿六日壬寅金滿

大會歲對歸忌裁衣拜官昇壇嫁娶移徙葬埋斬草除服

廿七日癸卯金平

大會歲對復裁衣昇壇嫁娶移徙沐浴鎮□

廿八日甲辰火定

大會歲對內財吉

廿九日乙巳火執

水泉動

大會歲對重裁衣拜官昇壇移徙沐浴

十二月大天道西行

一日丙午水破 溫漠

大陰陽衝擊血忌天孛厭對葬

二日丁未水危

大會歲對復四激月煞

三日戊申土成 大會歲位母倉急焦坎祭祀入學移徙解除修造

四日己酉土收 大會歲位天恩母倉修造葬埋□解除

五日庚戌金開 大會歲位天恩裁衣起土治病通渠入學吉

光啓四年曆 PELL IOT CHINOIS 3492

十一月小建甲子（以下略）

四日戊戌木開 裁衣治病吉

五日己亥木閉 蓋屋塞穴吉

六日庚子土建 地季拜官市買吉

七日辛丑土除 嫁娶治病掃舍吉

八日壬寅金滿 歸忌裁衣拜官嫁娶葬埋吉

九日癸卯金平 正

十日甲辰火建 內財吉

十一日乙巳火執 移徙沐浴吉

十二日丙午水破 血忌天季治病吉

十三日丁未水危 往亡安床帳吉

十四日戊申土成 母倉九焦九炊祭祀入學吉

十五日己酉土收 魁

十六日庚戌金開 天恩裁衣起土治病吉

（注）

- （1）『新唐書』呂才伝には「麟徳中卒」とある。
- （2）大衍曆は開元十七年（上元二年）行用。
- （3）源保の実父は源信、貞観十年（八六八）薨、贈正一位、五十九（『公卿補任』第一篇）。『尊卑分脉』第三篇嵯峨源氏参照。『平安遺分』古文書編第七卷、三三〇、坂本蓮華院文書（長寛二年九月廿五日）に「散位源保之坪付」とみえるが別人であろうか。
- （4）山下克明「陰陽道の典拠」『平安時代の宗教文化と陰陽道』一九九六年八月刊 岩田書店。
- （5）渡辺敏夫『日本の暦』一九七六年十一月刊 雄山閣。第一編第五、六、七章に詳説されている。但し、中国・朝鮮の暦注は今後の作業に俟つ。
- （6）1. 『続日本紀』養老五年（七二二）正月甲戌条に「宰術正六位上山口忌寸田主」。賀茂在富亨本『注定付之夏』（永正八年八月一）五月八日、国立天文台蔵）「蝕符合賞事 養老五八依日蝕賞山口田主」とみえる。2. 『中右記』元永二年（一一一九）四月朔日丙子条に「今日無日蝕、若是算術之相違歟」とある。
- （7）京都の吉田神社、吉田社祠官の四代にわたる日記、応永七年（一四〇〇）三月一日丙寅条に「月蝕、曆注曰、大分十五分之八半強」、同十年正月十六日甲午条に「月蝕曆注云、大分皆既」とみえる。
- （8）『三國史記』第七、「新羅本紀」第七、文武王下 十四年春正月、入唐宿衛大奈麻德福傳學曆術還、改用新曆法。
- （9）今井漆「飛鳥時代の曆法」『天官書』第一輯。今井氏は銘文の「丙寅年四月大旧八日癸卯開記」とある十二直「開」に着目され、「天智天皇五年（六六六）の灌仏会の四月八日は元嘉曆では癸卯日であるが、麟徳曆では甲辰日となる。すると十二直の癸卯日は記銘の如く開であるが、麟徳曆の灌仏会の日は閉となる」と、四月の月建は巳であって、この年の四月節からの巳は癸巳となり、よって癸卯が「開」となり、甲辰では閉なる。この刻文中の「旧」とは元嘉曆か、戊寅曆をさしたものであろう。旧曆に対する新曆が麟徳曆である。何故、麟徳曆によって刻さなかったのか、疑問が残る。
- （10）『旧唐書』懿宗本紀、大中十四年十一月丙午朔、丁未改元とある記事を、今井漆氏は「十一月一日丙子、二日丁丑とし、備考に「丁丑冬至、同日改元」と記している（平岡武夫『唐代の暦』一九五四年五月刊 京都大学人文科学研究所）。
- （11）藤原道長が料紙として用いた長徳四年（九九八）具注曆と『大唐陰陽書』とを比較すれば一目瞭然である。
- （12）利光三津夫『律の研究』（第四部第三章第一節緒言）一九六一年一月刊 明治書院。
- （13）『古代文化史論攷』第九号 一九八九年十二月刊 奈良・平安文化史研究会。
- （14）『東方学報』京都 第三十五冊 京都大学人文科学研究所。
- （15）現在、今井漆氏の著作集出版を計画、私家版（ガリ版刷）の論集のほか、未発表原稿を掲載する予定である。氏は歴史研究者のための曆学史を研究され、その恩恵は計り知れないものがある。今井氏の諸原稿の蒐集は、大東文化大学東洋研究所の研究調査費助成（平成十二年度）の一部による。改めて感謝を申上げる。